

Topic 56

米国ネブラスカ州の VCP

- 1) こんなところです
 - 2) ネブラスカ州の VCP
-

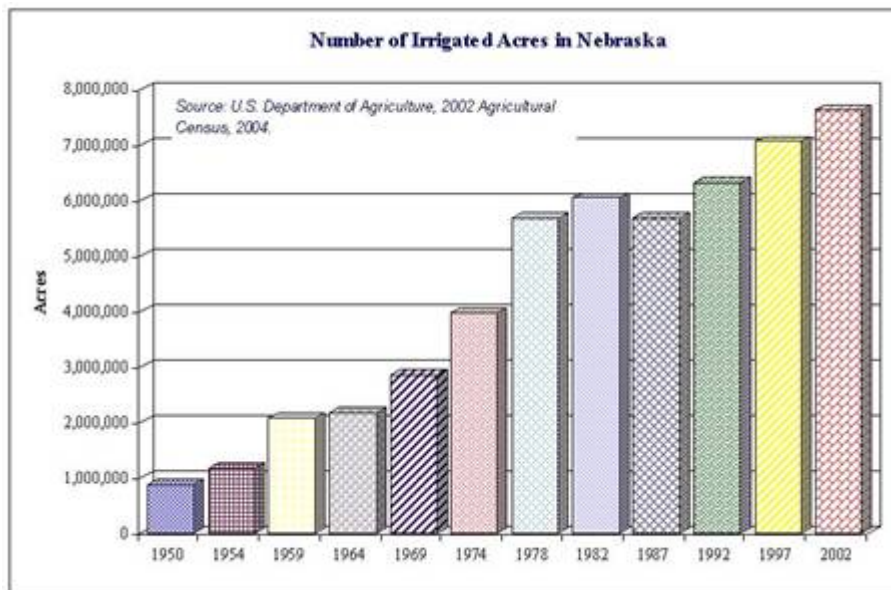
お疲れ様です。環境メルマの佐藤です。ここ 3 週続けてお送りした特別号は如何でしたか。今週は通常 Topic に戻って、米国ネブラスカ州のブラウンフィールド事業の様子をみてみます。

1) こんなところです

ネブラスカ州は、前回ご紹介したカンザス州の真北に位置しています。米国に加入したのは 1867 年 3 月 1 日 (37 番目)。州の総人口は約 176 万人 (2006)、人口密度は約 9 人/k m²。州都はリンカーン、州最大都市はオマハです。

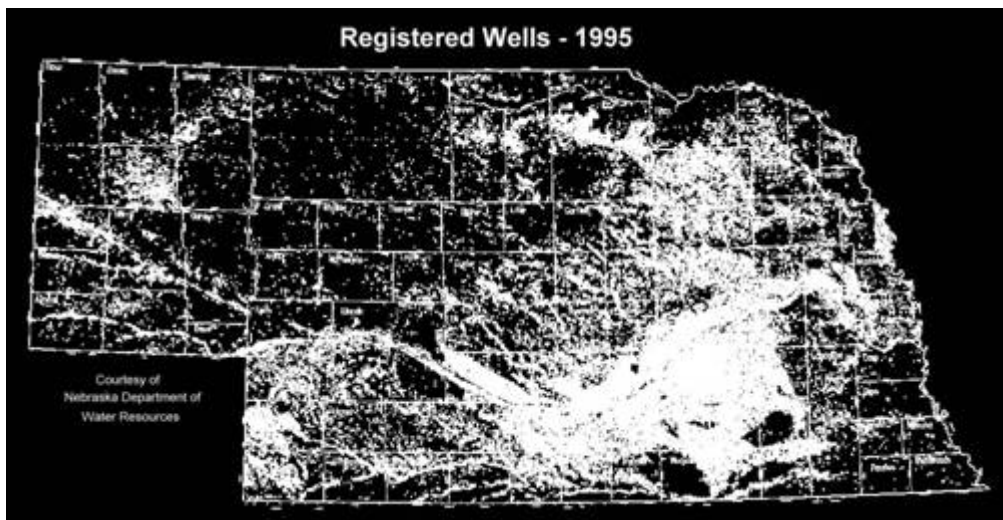
同州の大部分はグレートプレーンズ (大穀倉地帯) に位置しています。降水量が比較的少ない同地域は、かつては農業に不向きな土地であると考えられていました。しかし、従来の農業形態から科学的農業 (生産および経営) へと転換したことにより穀物生産量がグッと伸び、米国有数の農業州となったのです。ちなみに主要生産物はとうもろこし、大豆、および牛肉、豚肉など。その他、同州の経済を支えている重要な産業として、運輸業、製造業、電気通信、情報技術、保険があるようです。

ここでちょっと下の図を見てみてください。これは 1950-2002 年におけるネブラスカ州の灌漑用地面積を時系列で示しています。およそ 50 年で灌漑用地が約 8 倍に増加になっています！さて農業用水はどのようにして確保されてきたのでしょうか。



(出典 : <http://info.neded.org/stathand/esecc6.gif>)

じつは同州の灌漑用水全体の7割以上は地下水にたよっているのです。下の図を見てみてください。この白い点はぜ〜んぶ井戸です。こんなに沢山の井戸からお水をくみあげて農地を潤しているのですね。この地下水源は将来水が補給されることが殆どない種類の帯水層（化石帯水層）なのだそうで、このままお水を使い続ければ当然地下水は枯渇し、今の農業経営および食糧生産量に大きな打撃が生じると警告されています。



(出典 : <http://info.neded.org/stathand/parttwo/regwells.gif>)

これからネブラスカ州の農業経営、つまるところ地下水利用はどのように変化していくのでしょうか。

2) ネブラスカ州の VCP

ここからは本題のブラウンフィールドです。1995年、ネブラスカ州では「浄化対策モニタリング法（RAPMA：Remedial Action Plan Monitoring Act）」が施行されました。これを受け、州の環境局が汚染サイトの自主浄化プログラム（VCP：Voluntary Cleanup Program）を立ち上げました。立ち上げたのはいいのですが、プログラムはあまり活用されておりません。同州はブラウンフィールドをそれほど問題視していないようにも見えます。

ネブラスカ州環境局のウェブサイト情報によると、VCP実施状況は以下の通りです。

- ・ 浄化終了サイト 9件
- ・ 登録予定サイト 3件

このVCPは、プログラム立ち上げ時からあまり成長していません。まず、浄化目標について詳細が決められていないのです。登録費用は\$5,000（約60万円）と比較的高額になっていますし、これだけの登録料を支払ったうえで浄化対策を実施しても、州は不起訴契約（Covenant Not to Sue）を約束しません。つまり州からの環境責任保護の仕組みがないのです。このプログラムへ登録してサイト浄化を進めるメリットがあるのでしょうか。「坂野のつけたし」で実際の事例をみてみましょう。

来週は、アイオワ州とミズーリ州の2州をご紹介します。

Thanks God It's Friday!

Thanks God It's Brownfield!!

環境メルマ 佐藤 (t.sato@ers-co.jp)

坂野のつけたし (banno@ers-co.jp)

Nickname - 「The Cornhusker State（とうもろこしの皮むき人の州。84000本の井戸から水を汲み上げてとうもろこしを育てる）」 「The Tree Planter's State（昔は、防風林、果樹園、燃料用にたくさんの木を植えたそうです）」 「Bug-eating State（牛などの周りに集まる虫(bug)をたべるのは、小さな鳥）」。

事例紹介 - Omaha（オマハ）：オマハは、ビルゲイツに次ぐ資産家であるウォーレンバフェット氏が居を構える、ネブラスカ州最大の・・・、といっても人口でいえば豊田市や町田市とほぼ同じ40万人程度の都市です。ミシシッピ川の支流であるミズーリ川の西側に位置するこの街は、農業関係が主要な産業で、保険や交通・通信などの分野で伸びを見せています。

さて、このミズーリ川に沿ったリバーフロントには、かつては行き交う船のためのドックを中心とする産業地域、今となっては環境問題も懸念される、廃れてしまった地域がありました。米国環境保護局は、この地域に対して20万ドルのアセスメント助成金を出すことを決定、さらに加えて、米国陸軍工兵隊からも12万ドルの資金の提供を受けて、詳細な調査が進められました。上手に調査を行って、予定よりも多くの範囲を評価することもできたようです。

ひとつ特徴的なのは、この地域の開発事業が、州のVCPだけでなく、地域の住民で組織された”Back to the River” initiative（「川に戻そう」運動？）の協力も得て行われたことです。子供たちの世代にわたって、地域のためになるような開発をめざしたこのプロジェクトにより、歩行者用の橋、会議施設、マリーナなどができあがり、750人の雇用が生まれました。

(http://www.epa.gov/brownfields/success/omaha_ne.pdf)